

## 和田先生を憶う

### 山崎國紀

狭い曲折した階段を上っていくと、(後に改造された)先生の書斎である。沢山の本がキッチンと整理された部屋の中で先生は「やあ、いらつしやい」と迎えられる。温かな目なざしで、こちらも、ほっとする。まさに親父に会ったような気分になれる。これが和田繁二郎先生のお宅をお訪ねしたときのパターンであった。

恐らくこのことは多くの人が経験されたことであろう。

先生は温容だが、その内面には実に厳しいものをもっておられた。先生は自分のことを「私はいじめられっ児だよ」とよく言っておられたが、しかし、決して心の中では屈されないのである。大学の人間関係の中でも、先生はそれをしばしば経験されたが、結局、一歩も後退されなかった。まさに外柔内剛の人であった。身におぼえない中傷をされても、じっと耐えられる。そんなとき繊細な神経の営為の中から、むしろ名歌が生まれることが多いことが多かったに違いない。

晩年になって、明治の女流文学について大著を出されたので、先生を明治女流文学の研究者と思っている人が多い。むしろ間違っていない。七十歳を過ぎて、あれだけの大著を出されると言う

息の長い研究者としての鑑をわれわれに示された。

だが、先生の本領は文学史家にあつたのではなかつたかと思う。先生の『日本近代文学史』は、いかにも几帳面で具象的である。

一九六〇年代の初めの頃の初夏であつたか。

その頃、立命館はまだ広小路に在り、私は、先生の狭い研究室を、しばしばお訪ねしたものである。先生は文字通り、本と雑誌の山の中に埋もれ、『日本近代文学史』を執筆されていた。明治十年代の戯作小説にも、先生の文学史は、相当力を入れておられるが、それらの初出雑誌を傍に置かれ見て触つて実感をもつて文章を綴つておられる。そして明治、大正時代の主要小説は、ほとんど読破され、先生独特の評価を与えられたのである。

東京には吉田精一をはじめ、沢山の近代文学史家が居たが、関西では和田先生お一人ではなかつたかと思う。

六三年に刊行された『日本近代文学史・近代と現代』は、その大成果を示すものであつた。私は、その頃、よく先生の研究室を訪ねても、十分以上とどまることはなかつた。先生の文学史執筆にかけられる熱情の前で、それ以上先生の貴重な時間を奪うこと

ができなかったのである。

晩年、大谷女子大を停年になられたとき、私は花園大学で講義をもつていただくことをお願いした。先生は自宅から距離的にも近く運動にもなるといつて喜ばれ、週一回通つて来られた。

先生は朝食は御飯だから昼はサンドイッチだと言われ、弁当の時間は、私の研究室は、さまざま話題でにぎわつた。私の毒舌に刺激されてか、あの温和な和田先生が、時折鋭い人物論を展開されることも一回や二回ではなかつた。

闊達に豪快大度の僧まじる

禅宗立大学講師控室

これは花園大学の講師室の雰囲気を取られた和田先生の短歌である。

「豪快大度の僧」とは、当時、花大に非常勤で来ておられた現天龍寺管長平田精耕老師のことである。先生は、「豁達な坊さんやなあー」と感心しておられたのを憶えている。

先生は臨済禅独特な明るく木訥な空気を好まれていたようである。

先生は七十代半ばから四年余り講義をもたれたが、病を得て花大を去られた。先生が長い教員生活の中で、最後の教壇となつたのは、花園大学であつたのである。

いつも火曜日であつたが、昼の私の研究室が急に淋しくなつた。あの慈眼に接することが、もはやかなわなくなつた。そして再び、あの曲折した階段を上つて先生にお会いすることも出来なくなつた。

残念でならないのである。

(やまざき・くにのり 花園大学教授)